我流神話大全①「竹林幻想」

『竹林神話』　創世記より
　原初、世界は天と地のみであった。地を踏むもの、空を飛ぶものは何一つ存在しなかった。
　初めに現れたものは一つの筍であった。それは瞬く間に太い竹へと成長し、神が生まれた。後の人が呼ぶところの、邯淵である。原初の竹は後に「妄想竹」と呼ばれた。邯淵は一本の竹のみが存在する世界を見渡し、おもむろに「竹よあれ」と言った。世界は竹で満たされた。邯淵はこれを見て「おもしろし」と言った。そして火と水を創造するとそれを適当な竹に放った。火のついたほうは爆ぜて空に昇り太陽に、水のついたほうはゆるやかに流れて月になった。続いて邯淵は様々なものを創った。とりわけ、無意味なものやヘンテコなものを好んだ。（中略）邯淵は次第にヘンテコなものしか創らなくなった。世界は無秩序になったが、これは邯淵の好むところである。少数の「普通の」生物達は不満を高め、ついに一人の男が「打倒邯淵」と立ち上がった。蓬翔である。（中略）蓬翔と邯淵の戦いは長期にわたり続いた。六十七年に一度咲く妄想竹の花が咲いては散り、積み重なった花弁が舞い上がって霞となったとき、戦いは終結した。蓬翔は弱った邯淵と妄想竹を一つの竹に封じ込めた。しかしその際、蓬翔は邯淵に引っ張られて共に封じ込められてしまった。
そうして世界に秩序が戻った。

○

　「竹は世界で一番美しい植物である」
私の友人、吉野の口癖である。というか本当に竹のことしか話さない、一言でたとえるならば「竹狂い」である。そんな彼に冗談で言ったことがある。
「もういっそのこと竹林に住めば良いのだ」と。
……思えば、これは痛恨の一言であった。
　春と夏の気候が入り混じって一種異様な空気を作り上げていた五月某日。私は吉野の住まう下宿へと向かった。竹はもとより植物全般が好きな彼は、下宿を選ぶ際にわざわざ木造の建物を探し出した。雨や風の激しい日などは建物全体がみしみしと揺れ、命の危険さえ感じるが、本人は気にしていない。
　吉野の下宿へ行くのは一ヶ月ぶりである。というのも彼はこの一ヶ月間、中国旅行をしていたからだ。「本場の竹を見に行く」ということらしく、奴のことなので植物園の竹にケチをつけまくり山に入って竹林探索でもしていたに違いない。私は苦笑して、いつも鍵がかかっていない戸を押し開ける―と同時に閉めた。吉野がいることは認識した。しかし、他になにか妙なものが見えたような気がする。頭の中で残像を組み合わせて解析したところ、苦笑ではすまない結果が出てきたので私はおそるおそるもう一度戸を開けた。
「よう、ひさしぶりだな」

かくして私が見たものはニマニマ笑っている吉野と、それはそれは立派な一本の竹であった……。
　さて、突然ではあるが、諸君は「壺庭」というものをご存じだろうか。平安時代、貴族が住まう寝殿造りの建物の中にある中庭のようなものだ。中でも帝のおはします建物のそれには植えられている植物にちなんで通称がつけられたという。さしずめここは「竹壺」といったところか。なんと風流な……。
「お前な」
何が悲しくて久々に会う友に壺庭についての説明を聞かされなくてはならないのか。私は部屋の隅で異様な存在感を放つ竹を見やった。吉野の部屋は中国へ行く前から散らかっていたが、今は竹のほかにお土産と称して買った大量の変な置物やらなんやらが加わってもはや混沌と化していた。これのどこが風流か。
「竹林を探しに山に入って数日目に、とある少数民族の村にたどり着いたんだ。本当に奥の奥で、まだ誰にも認知されていないんじゃないかなあ。竹林に囲まれていて、とても素敵なところだったよ。三日ぐらい滞在した」
「で、あれはなんだ。友好の証としてもらったのか？」
「いや、こっそり切った。村では竹は神聖な植物らしいから、頼んでも無駄だと思って」
私は思わず耳を疑った。
「信じられん奴だ……」
「たまにはね。それより見てくれよ。絶妙な色合いと幹の太さ、葉の付き具合が素晴らしいだろう？」
あきれる私をよそに吉野は語る。まるで恋人自慢をしているかのようだ。彼に恋人がいたことはないが。
　諸君も御存じだろうが、竹は伸びる。ぐいぐい伸びる。元々、天井までの高さであった竹は二階へ到達し、苦情がひっきりなしの状態になった。しかも、驚いたことにしばらくすると新たに竹が生えてきた。それを見た吉野は歓喜し、もっと増えるようにと喜んで床を提供した。
「そろそろ追い出されるかも知れんなあ」
自分の生活スペースが無くなっていくことに微塵も頓着しないこいつは大物なのか阿呆なのか。危機感を持つようにと説教すると、返事の代わりにとれたての筍をくれた。もはや返す言葉も見当たらず、筍をかかえて竹をかき分け、部屋を後にした。
　そうして日に日に伸び、増え続けた竹は窓を割り、屋根を突き破り、筍を量産して、ついに恐るべき事態へと発展した。
　ある日私が下宿へ向かうと、そこにあったのは巨大な緑色のかたまりであった。否、よく見るとそれは竹に覆われた元下宿であった。周りには人だかり。何かのサイレンや、人々の怒号が聞こえる。
「もしもしそこの人、いったいどうしたのですか？」

近くにいた人に尋ねると、その人は「自分はここの下宿人だ」と名乗った。
「僕の部屋はすでに竹だらけだったのですが、今日の朝起きてふと気付くと、成長しているんです。それも目に見える速さで、僕は命の危険を感じて急いで外に出たわけです」
建物の周りにいるのは脱出した下宿人と警察、大勢のヤジ馬であるらしい。
「竹を切り倒せ！」
「いや、いっそのこと建物自体をぶち壊せ！」
その時私は、友人の姿が見えないことに気がついた。まさか建物の中に閉じ込められて出ようにも出られない状況なのではあるまいか。人々は大家の指揮のもと、手にナタやら何やらを持ち、いまにも建物に切りかかりそうである。
「待って下さい！中に友人がいるんです！」
私は吉野を救い出すべく人々を押しのけて建物の入口へと向かった。中に入ることは困難を極めたが、一心不乱に竹をかき分けてとりあえず廊下と思われるところへ到達した。
「おーい！いないのか？」
とにかくみっしりと竹が生えているので、歩きにくいことこの上ない。
「いかん……これでは部屋の場所が……」
見渡す限りの竹の中で私はため息をついた。慌てて中に入ってしまったが、これは一旦外に出たほうが良さそうである。そう思って元来た方向へ戻り始めた私は、ほどなくして違和感を覚えた。さほど進んでいなかったはずなのにいつまでたっても外に出られない。向きを間違えていたら厄介である。そう心配していた私の頬を、さわやかな風がなでていった。瞬間に緑色な香りがする。まるでこれは―
「竹林」
まさに今お前は竹林にいるではないかとツッコミをするなかれ。確かにその香りは吉野に連れまわされて幾度となく嗅いだ、天然の竹林の香りであった。ということは分かったが、つまりどうなっているのだろうか。ここはあくまで竹の生えた「下宿」である。そう自分に言い聞かせて下を見ると、そこにあったのは木の廊下ではなく焦げ茶のふかふかした土であった。まさかと思って上も見ると、高く伸びた竹に邪魔されてよく見えない。不安に襲われた私は走りにくい竹の間をがむしゃらに移動した。
「おわっ！」
いきなり視界が開け、私は竹に足をひっかけて土の上に身を投げ出した。
　外に出ることができたのだろうか。そんなことはないというのはすぐに分かった。もはや何が何だか分からぬ。私はその場に胡坐をかいた。左右と後ろには竹林、前には道が伸びている。しかしその奥も暗くなっていて先が分からない。私はとりあえず深呼吸した。こうして静寂に身を任せていると竹林もいいものだと思えてくるので怖い。すると、突然台風のような風が吹いて、私は思わず目を閉じた。
　目を開けると私は大量の黒い魚に囲まれていた。どれもこれも私をぎょろぎょろと見つめてくるのではなはだ不気味だ。

「お前はこの世界の者ではないな？」
魚に話しかけられたことに私はあいた口がふさがらなかった。先ほどからうっすら思っていたのだが、私は夢を見ているのではないのだろうか。
「そうですね。友人を捜しているのですが、何か知りませんか？」
黒い魚たちはお互いになんやかんや言い合ったあと、私に言った。
「私たちは知らない。しかし、蓬翔という者に聞くとよい。私の知り合いもいるので、話をしておこう」
ホウショウという人もここに迷い込んでしまった人なのだろうか。私は黒い魚に礼を言うと目の前の道を進むことにした。
　しばらく歩いて後ろを振り返ると、今まで歩いてきた道が竹に埋まっている。もう後戻りはできないということなのだろうか。私は少し震えた。
　まったく、なぜにこんなことになってしまったのか。今更ながら私は、吉野が実はしっかり脱出していたのではないかという考えを思いついた。もしそうだとしたら、私はとんだ早とちりということになるだけでなく、このわけの分からない世界から出られないままになるかもしれない。阿保ではないか。これは、どうしても吉野を見つけ出す必要がある。断固として！
しばらく一人で歩いていた私は、左右に立つ竹の色が薄い茶色に変わってきていることに気づいた。枯れているのだろうかとじっくり見てみると、花の模様がたくさん描かれている。どこかで見たような模様に上を見る。
「こけしか？」
巨大なこけしが乱立している光景はなかなかにおそろしいものがある。私は驚いた拍子に一つのこけしに体当たりしてしまった。根を張ってしっかり立っているものだと思い込んでいたこけしは、実は置いてあるだけだったらしい。ぐらぐらと揺れたかと思うと、隣のこけしに倒れこみ、頭部分がとれて降ってきて、私の隣の地面にめり込んだ。悲鳴をあげて走って道を抜けようとするが、こけしはドミノ倒しのように倒れていき、私の近くに頭がズドンズドンと落ちてくる。幸い一つも当たることはなかったが、すれすれにこけしが落ちた衝撃で、私はふっとんでしまった。起き上がるとそこはもう普通の竹林であったが、後ろからどんどん竹が生えてきて道をふさいでいく。私は必死で走った。今までにないほどの運動量である。
迫りくる竹に必死で逃げていた私は、突如道が途切れたことに対応できなかった。不幸なことに、その先にあったのは広大な池であった。落ちた私はとっさに泳ごうとしたが、予想に反してどんどん沈んでいく。必死に水をかいているうちに、私は水中で息ができることを発見した。辺りにはまばらに竹が生えており、その間を錦鯉が悠々と泳いでいる。私は時折鯉をなでながらゆっくりと池の底を歩いて行くと、不意に体が持ち上げられた。驚いて見ると、大型犬ほどの大きさの錦鯉が私を乗せて進んでいく。
「どこに連れていくつもりだ？」

もしかすると、と思いたずねたが錦鯉は返答せず、そのまま泳いで大きな岩の前で止まった。ほのかに光を放つその岩は近寄ると温かい。
「で、これがなんだ？」
鯉は私を地面に下ろすとどこかに泳いで行ってしまった。私はしばし困惑してあたりを見回した。すると岩の上の方から男性が降りてくるのが見えた。
「貴君は外の世界から来た者だな」
「そうですが……もしかして、あなたは蓬翔という人では？」
すると男性はうなずいた。
「いかにも私は蓬翔である。それより、貴君のほかにもう一人外の世界から来た者がいるという認識だが」
思わぬ言葉に私は表情を緩めた。
「そうです、まさにその通り。私の友人で、竹狂いの阿保のことです。そいつを探し出して外に出たいのですが」
私はその他に吉野のせいで起きた一騒動を説明した。すると蓬翔は腕を組んで目を閉じた。しばらくして口を開く。
「よかろう。今の説明で、友人がどこにいるのかが分かった。見つけた際には外の世界に戻すことを約束しよう。しかし、ひとつ厄介なことがある」
「なんですか？」
「我が宿敵、邯淵のことだ」
それから、蓬翔は古の、神代の頃のことを語って聞かせてくれた。
「―共に封印されてしまった私は焦った。邯淵はここで新たに世界を創って、再び外の世界に出られる日を虎視眈々と狙っていた。それを知ってから私は奴を倒そうとしているのだが、なかなか成功しない。太陽を使って奴を燃やしてしまおうとも思ったが、逆に太陽を水に沈められてしまった」
私は驚愕した。この大きな岩は、元は太陽だったのか。と同時に邯淵に対しての恐怖心がわいてきた。
「では、友人は邯淵と一緒にいるのですか。まさか、友人を何かに利用するために…」
「いや、そこまでずるがしこくはない。竹の話で盛り上がりたいだけではないか？」
類は友を呼ぶ。何と迷惑なことだろう。蓬翔はいつの間にか錦鯉を二匹連れてくると、私に乗るように促した。
「邯淵の居場所なら分かっている。行こう」
私が乗ると、鯉は竹の間をするりするりとぬけていき、岸に続いている階段の前で止まった。鯉から降りてから蓬翔に続いて階段を上がり、竹の間を歩いて行く。だんだんとあたりが華やかになっていることに気づいた。水中でもないのに鯉が泳いでいて、色や模様のついた竹に橙色の光を放つ提灯がぶら下がり、縁日のような雰囲気を醸し出している。
「ここである」

蓬翔は竹に布がカーテンのように付けてあるところを差した。中からは時折楽しそうな笑い声がきこえてくる。蓬翔は深く息を吸い込むと、一気に布を押して中に入った。
「やれやれ、物騒な者たちが来ましたな、吉野殿」
「そうですな、…あっ」
吉野は私の顔を見て笑いを引っ込め、焦り顔になった。
　そこは、この世界に入って一番の華やかさであった。邯淵と吉野は大きな提灯の頭部分を囲んで座っている。二人の後ろには極彩色の巨大な竹が生えていた。
「邯淵、何をしている」
蓬翔が邯淵を見下ろして言った。
「なんのことかな」
「この者に聞いた。外の世界への竹の侵食、お前だな。今すぐ消せ。外の世界はお前が統治していた頃とは変わっている。竹を増やしたところで無意味である」
その言葉に邯淵は笑いながら答えた。
「蓬翔、私は何も統治しようと思っているわけではない。ただ、世の中に無意味なものがあふれているのは何とも『おもしろい』ことだと思ってね」
見るに、邯淵はどこまでも無邪気である。世界を竹で満たすのも。水中に太陽を沈めるのも、こけしの乱立も、ただ単に『おもしろいから』に他ならないのであろう。
「吉野殿は先ほど知り合ったのだ。同じ竹好きとして通じ合うものがあったのだよ」
「そんなことは聞いていない！お前の『おもしろい』と思うことは迷惑にすぎない。そこにある太い竹、妄想竹だな。もう一度封じ込めるぞ」
すると邯淵は「けけけ」と笑いながら妄想竹に近づいた。そして、白い花を取り出す。
「太古、生まれて間もない頃の私、は霞のようにむくむくととふくれあがる面白き事への欲求を抑えることをしなかった。迷惑だとは思っていなかったし、今も思っていない。諸君、私が思うに、これが生きとし生けるものの本能である。おもしろきを求めて何が悪い。それを抑えてすっかり無くしてしまおうとする貴君らこそが迷惑なのだ。妄想で終わらせて、隅に追いやってくれるな」
表情を変えず話し続ける邯淵の手の中で白い花が少しずつ増えていく。手からあふれそうになったころ、彼はそれらを宙に放り投げた。それは量を増やしながら当たりを包んでいった。花が無くなったとき、邯淵の姿はなかった。
「あいつ逃げたな。あの花は六十七年に一度咲く、魔力を持つ妄想竹の花だ。あれを手に入れたせいで邯淵は調子に乗っているのだな」
蓬翔は手近な鯉の頭を踏みながら上の方へ行ってしまった。私と吉野は鯉に乗って上まで運んでもらい、竹林の上へ出た。空から見て、あらためて私は驚愕した。池以外、全てが竹の緑色である。蓬翔と邯淵は空中を飛びまわって時折攻撃し合っている。邯淵は白い花を、蓬翔は水を使っているようだ。私たちは見守ることしかできなかったわけだが、蓬翔が優勢なのは見て取れた。ある瞬間、邯淵が白い花を手放してしまったのを見逃さず蓬翔はそれを

奪い取り、元の妄想竹のところへ戻ってきた。慌てて邯淵が後を追う。戦いは地上戦へと持ち越された。
「覚悟しろ、邯淵！」
少林寺拳法のような構えをとった蓬翔は華麗なる技で邯淵を叩き伏せた――のではなく、妄想竹に邯淵をぎうぎうと押し付け始めた。
「やめて押さないで！また封印なんてないよぅ助けてー！」
邯淵は情けない声をあげながら妄想竹の中にすいこまれていった。私たちは安堵のため息をついた。が、ふいに蓬翔が声を上げた。
「火だっ！」
邯淵はすいこまれる直前に火を放ったのだ。それは乾いた竹に燃え移り、パチパチと不吉な音を立てていた。
「もうやけくそぢゃあーっ！」
辺り一帯に邯淵の叫び声が響いた。
「爆ぜるとまずい。死ぬぞ」
蓬翔は焦った声を出した。火は周りの竹にも燃え移る。妄想竹も例外ではなかった。
「これに乗れ」
蓬翔は手近な筍を指差した。と同時に筍はぐいぐいと伸びて竹になる。私と吉野が竹にしがみつくと竹の伸びるスピードは大きくなり、竹林を見渡せる位置で止まった。見下ろすと蓬翔が必死に消火活動にあたっているのが見えたが、すでに手遅れと見えた。
「ふざけるな邯淵！」
蓬翔は何かを拾い上げた。それは先ほど邯淵が姿をくらます際に使った、妄想竹の花であった。彼は同じようにして大量の花弁を出すと、それらで火を覆った。まもなく火は消された。しかし花弁の勢いは止まらず、私たちの周りは白く染まった。
「大変迷惑をかけたな。しかしもう大丈夫だ。貴君らを外の世界に戻してやろう。私たちも、もといたところに帰るとするよ」
私たちははるか下からの声を聞いた。するとパンパンパン！と音をたてて竹が爆ぜる音。まさか今、しがみついているこの竹ではあるまいな。
「ちょ、ちょっと待て、どうなっているんだ！」
私が叫ぶのと、足もとの竹が爆ぜるのが同時だった。私たちは空中に投げ出された。いよいよ私たちは死を覚悟した。
　目が覚めると、吉野の部屋に横たわっていた。私たちは跳ね起きると一心不乱に窓から外へ出た。と同時に大勢の人に囲まれる。
「出てきた！」
「お前たち何をした！」
どうやら歓迎されているようではなさそうだ。事を把握できていない私たちに誰かが説明してくれた。どうやら、私が中に入って行った後、下宿人たちが頑張って誰も建物を壊さな

いようにしてくれていたらしいが、数時間ほど経ってとうとう抑え切れなくなってきた。すると、建物の中から焦げ臭いにおいが漂ってくる。危険を感じた人々があわてて離れるととてつもない爆発音がして、辺り一帯白に染まった。おさまってから私と吉野が出てきたというわけだ。私は下宿を振り返った。
「竹が……」
そこには竹がすっかり消えうせた、穴だらけの下宿があるのみだった。そして其の周りの地面には、白い花弁が山のように積み重なっていた。

○

同時刻、中国の奥地、とある少数民族の村の近くに巨大な竹が現れた。村人たちが駆けつけた頃には竹は他のものと変わらぬ見た目になっていたため、見つけることは不可能であった。彼らは静寂さをたたえる竹林に祈り、それぞれの日常へと戻って行った。

○

　　穴だらけの下宿は取り壊されることになり、世間を騒がせた竹を思い出させるものはすっかり無くなってしまった。まだ数日しかたっていないというのに、私は「あれは夢だったのではないか」と思い始めている。しかし、吉野が竹のことを一切口にしなくなった理由を考えるにつけて、あの世にも奇妙な体験が現実にあったということを再確認させられるのである。